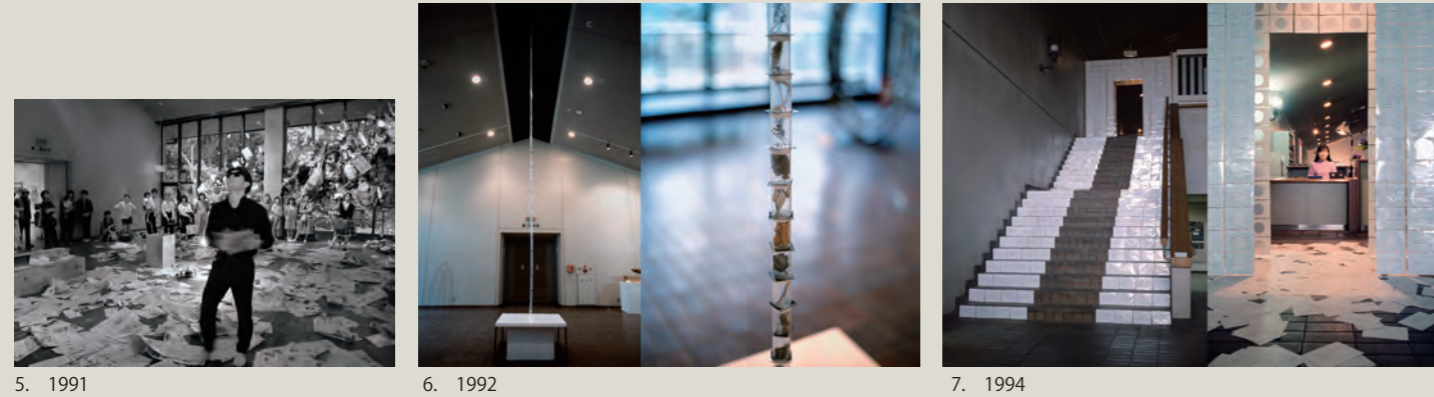
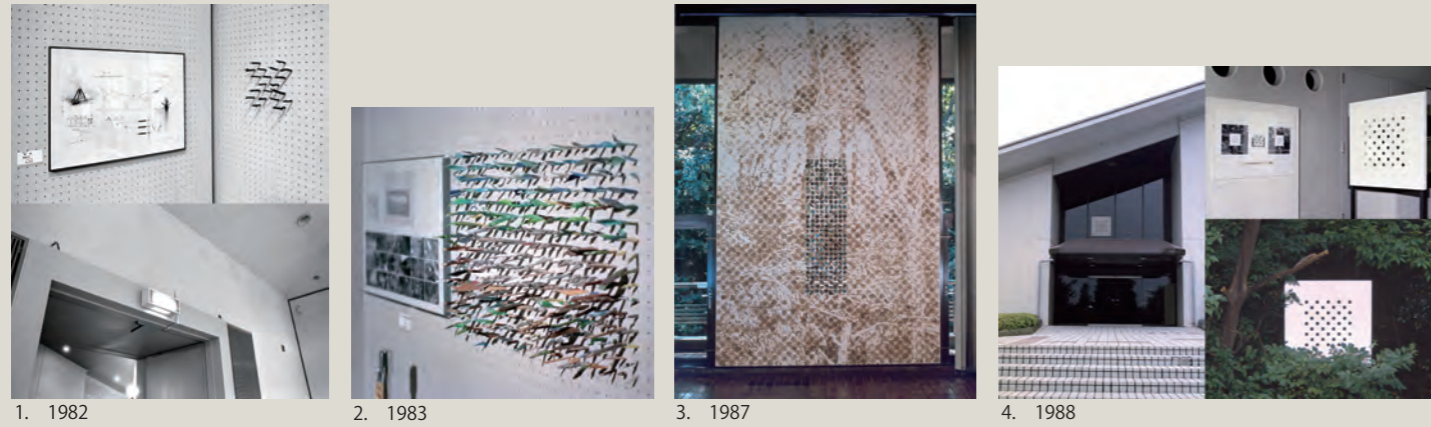


(これまで板美で発表した主な作品より 2)



1. 近傍系におけるフィールドワーク ドローイング、枝 館内各所・周辺地域に拾得した枝を設置
2. 近傍系におけるフィールドワーク 写真、ドローイング、美術館周辺からの各種拾得物
3. 近傍系におけるフィールドワーク 館内よりお林山を向く コットンパネル、現場の土
4. 近傍系におけるフィールドワーク 写真、ドローイングなど 館内外にパネルなどを設置
5. Land of Information 「物体(詩)」展でのパフォーマンス 当日の新聞、ラジオノイズなど
6. 土地の系 フィルムキャップ、各種拾得物とそれを拾った状況を撮影したフィルム
7. The phenomena on the Earth 1993年の世界の出来事の抜粋記事、地図など
8. Prospect #2 商品ケース、土、灰、砂など
9. 我らの在り処 「加害/被害」展でのパフォーマンス 地球儀、植木鉢、ロープなど
10. 「脱・現代美術教養論」展 美術館の場と貴方の二重像 ワークショップより
11. Forms from Home 各種の住宅物件情報 写真、地図、マップケース、土など
12. Walking on the Ground ビデオ映像、美術館模型、ブリキ、地図、土など
13. 「アーティストの気持ちに近づいてみる」展 会場 写真、オブジェ、フォトドローイングなど
14. Simultaneous Positioning 椅子の部材、鉄、メジャー、骸骨模型など
15. Beyond the Bounds 展示パネルに穴をあけるパフォーマンス

丸山常生による、休館中の美術館を使ったワーク・イン・プログレス



場所：板橋区立美術館 第二展示室
 制作期間：2018.4/19 (木)～5/5 (土)
 公開パフォーマンス：2018.5/6 (日) 14:00～

MARUYAMA Tokio "Work in progress" at Itabashi Art Museum under closing period 2018

見えなくなること 見えなくすること 変化し続けること

丸山 常生 (美術家・パフォーマンスアーティスト)

板橋区立美術館(板美)が開館した1979年は、私が公に発表活動を始めた年と重なる。地元ということもあり、これまで多くの発表をさせていただいてきた。私は長らく、ある環境(例えば東京という土地)の時間の流れや、その変化をテーマとしてきた。例えば、コミッションとして企画に携わった5年前の「発信//板橋//2013 ギャップ・ダイナミクス」展では、私個人の出自と板橋の地域性を絡めつつ、スクラップ・アンド・ビルドを繰り返してきた日本の近代化の過程をテーマとした作品※1を、館蔵作品を並置させて発表した。他にも例は幾つかあるが、これは作家活動の拡がりや作品の深化という点で、少なからずこの場からの恩恵を受けた経験の一つだった。

そのような、私の作家としての探求をフォローしてくれた板美の空間に、ひとまず区切りがつけられる。改修され、来年6月以降、建物の躯体は同じだが、空間はだいぶ変わるという。このたび休館中の展示室で、再び実験的挑戦ができるこの機会に、私は変化するこの場へのオマージュとして、ワーク・イン・プログレス※2という方法を選んだ。そこでは、自身の制作上のささやかな一区切りも重ね合わせてみようと考えている。

どうということかという、昨年、作品保管倉庫の一つが、老朽化に伴う諸々の事情で解体を余儀なくされ、保管していた多くの作品や資材群を廃棄せざるを得なくなった。身が切られるような思いをした反面、どこか汗を流した運動後のような爽快感も残り、奇妙な感覚を味わった。その中の一部、かつて制作した箱型オブジェ※3を一時的に救出し、今度のワーク・イン・プログレスに登場させるつもりだ。多分、それらは胎内回帰のように、かつて生まれた故郷に戻り、静止した時間がもう一度わずかに動き出すとともに、再びゆっくり止まり、消えていくことになるだろう。消えゆく場所(展示室も箱内部の空間も一つの場所だ)との、約2週間にわたるコラボレーション。

ところで細かいようだが、場所については、先に書いた「消える」というより「見えなくなる」という言い回しの方がふさわしい気がしている。それは物体が消滅するのとは少し異なり、場所には、その空間に抱え込まれた膨大な出来事(時間)が、見えない記憶として、隠れた次元に折り畳まれてしまう性質があると感じているからだ。

これに関連して、私はこんなコメントを書いたことがある。

全ての環境(場所といってもよい)には、それぞれ無数の固有のイメージや特異性が潜んでいる。現実の三次元の空間に、幾重にも襞のように別次元が折り畳まれているという、物理学の最新理論を持ち出さずとも、これは、実はわれわれにとって、なつかしい考え方でもある。

例えば、M・ブルーアの、最愛の祖母を亡くした時、初め感じなかった悲しみが、しばらく経ったある日、靴ひもを結ぼうとして身をかがめた瞬間、奔流のように溢れ出したという逸話
… (中略) …

ある場所にたたずんだり、ある仕草をした時に、突然昔の出来事を思い出したり、分からなかったことが理解できるようになったりする経験は、誰にも身に覚えがあるだろう。

空間と物と身体は、常にそれぞれの固有性において相互関係にある。私のインスタレーションやパフォーマンス(私はそれを

"install-action"と呼んでいる)は、その関係=「間」(すなわち環境そのもの)に潜んでいるイメージを、ある意図と偶然を伴って引き出し、繰り広げ、組み替えていくプロセスに他ならない。

(2015 芸術の絆展カタログ 上海梧桐美術館発行 ※下線部は今回のマーク)

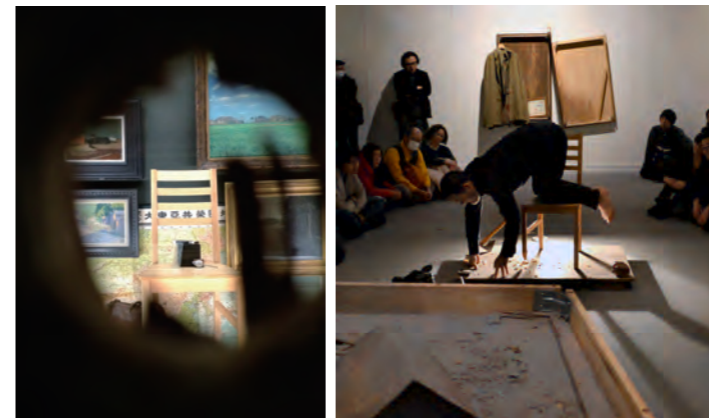
これは、よく言われる「見えないものを見えるようにする」という美術の一般的特性を、わたし流に書いたものだ。するとどうだろう。場所が「見えなくなる」ということは、引き出し、繰り広げ、組み替えていくプロセスの逆ベクトルと言えないだろうか。つまり逆にたどれば、時の流れの中で堆積された出来事を、その場所固有のイメージや特異性として整理し、まとめ、預けていくプロセスということであり、すなわち「見えなくする」(折り畳んで別次元に潜ませていく)という能動的な態度につながる。両者は大きなサイクルの中の双極の関係であり、同じことの裏表ということに気がつく。

ここまで抽象的に言わずも、もっとシンプルに「作ること⇔壊すこと」と平易に言い換えてみよう。これを巡る言葉をもう少し拾うとすれば、例えばこうなる。絵画の制作では「描くこと⇔消すこと」、彫刻の制作では「削ること⇔付けること」、コンピュータ用語では「圧縮すること⇔解凍すること」、街の変遷では「スクラップ・アンド・ビルド」…

さらに「見えなくする」とは「片付ける」とこと思い切って言ってみる。このように日常的な言葉づかいをすると、具体的な情景が脳裏に次々に立ち上がって来はしまいか? 例えば、私が昔からこだわってきた埋立て地の風景※4(埋立て中や再開発が始まる直前の様子は実に見ものだった)や、解体現場、散らかった部屋、等々。あるいは被災地、事故現場、もっと現実の問題に敷衍すれば、除染や廃炉作業までも…。もちろんネガティブなイメージに偏るだけではない。人により、それぞれ思い浮かぶ情景は様々だろう。

多分、私たちには「片付ける」の本来の意味である、物事の決着をつけることは困難で、何かをほったらかしにしてこの世を去っていくかざるを得ないことがある。ということは先行世代がほったらかしにしたものを、否応なく引き継いで生きている、ということでもある。つまり、人は何かを片付け、見えなくすることを引き

※1 2013 「発信//板橋//2013」ギャップ・ダイナミクス 展 会場風景 Generation Sorces 発生源としての場所
(左・中) ガラス展示室の前の仮設壁に空けられた穴から、館蔵品の近代絵画(東京の風景画など)や、いろいろな物が見える。机、椅子、父親の遺品、地図、その他
(右) パフォーマンス Transitionシリーズ(part1-3) から、part1でのアクション



受けなければならない時がある。それが自分に属していなくても、しなければならないことが。予定調和的なことだけでは済まされない時の流れの中で、変化する世界を観察し続け、偶然を受け入れながら、片付け、自らも変化し続ける。見て見ぬ振りをして見えなくなるのではなく、観察し続けて、見えなくしたり、より見えるようにしたりする。この一連(ずいぶんトートロジカルな言い回し!)のサイクルは、未来に向けた、記憶の継承をめぐる物語の一節一節になっていくのだと思う。

今回のワーク・イン・プログレスは、これを私のささやかな美術の現場で(ほぼ非公開の)行うことだと自らに確認しておきたい。

改修後の板美の、次の40年先はどうなっているだろうか? 美術館は今のような形で機能しているだろうか? 美術はどのように存在しているだろうか? 多分、私の身体は「見えなくなっている」が、どのようになっていて欲しいのか、今後の自身の美術活動への一つの課題としておこう。

そして板橋は、東京はどんな様子になっているだろうか? 推計では日本の人口は8600万人くらいまで自然減し、人口ピラミッドの形は上が広い壺型で、かなり不安定な形になっているらしい。グラグラしながらも倒れないで欲しいと願う。そして東京オリンピック後の環境が、人為的な理由で、まるで被災地のような相貌を帯びていくことのないように…。

何はともあれ、次代の建物が一区切りをつけるであろう、未来のいつかの時に向けて、板美、そしてお世話になった多くの関係者の皆様の益々のご発展とご清祥を祈念します。ありがとう。これからもどうぞよろしく。

(2018.4.19 作業初日、がらんどうの展示室にて)

(追記)

これを書き終え、1979年の活動スタート期に、「私の現実」というテキストを書いたことを思い出した。
http://archive.maruyamatokio.com/intro/grapy/grapy_texts/79genzitsu.html
これは自分の実家の解体がきっかけとなって、若き頃の模索する制作観を書いたものだが、似たようなインセンティブ(動機づけ)が、再び巡って来ているのかもしれない。

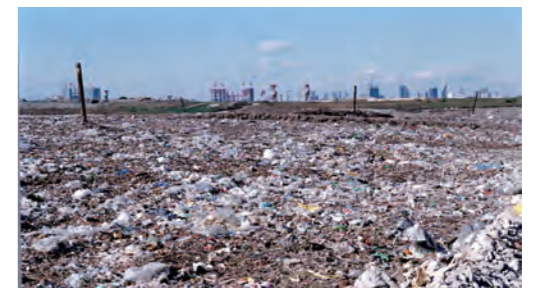
to be invisible, to make it invisible, to keep changing

※2 ワーク・イン・プログレス
準備中、進行中という意味を伴い、完成させることを目的としない経過的制作方法のこと。

※3 箱型オブジェ
展示やパフォーマンスに使用した材料の一部を、その場に立ち会った人のサインとともに封印した直方体の箱。90年代に約10年間継続し、60個ほど作られた。今回、すでに廃棄されたもの以外、板美由来のものを含め30個ほど使用する予定。



※4 埋立て地風景
東京湾岸の中央防波堤から都心方向を臨む (1994.11月 撮影)



(これまで板美で発表した主な作品より 1)

1989 "Dropping through" - 新都庁建設現場におけるフィールドワーク
フォトリレーイング 土、セメントなど (板橋区立美術館 蔵)



1999 「アトリエの謎」展 会場
フォトリレーイング ビデオ映像、写真、各種制作資料など

